

弾き歌い演奏技術習得のための一考察

左手伴奏の分析

A study on acquisition of nursery songs
for playing and singing
Classification of left hand accompaniment

飯泉祐美子(帝京科学大学)

森永美穂子(武蔵野音楽大学・玉川大学)

Yumiko IIZUMI (Teikyo University of Science)

Mihoko MORINAGA (Musashino Academia Musicae・Tamagawa University)

(要旨)

本論は「子どもたちの情操を育むために、豊かな響きの空間で保育展開ができることを保証したい」という考えのもと、保育者養成課程でのピアノ弾き歌い演奏について、入学時にピアノ学習が未経験に等しい初学者であっても、いずれ多彩な音色で弾き歌い伴奏ができることを目標とし、その手がかりとして楽曲の左手伴奏の分類を試みた。考察においては、独自の分類のための11のカテゴリーをもとに分類し、分類の結果として、『こどものうた200』の弾き歌い伴奏をするにあたり、単音刻み型→同和音連続型→単音和音型の順で伴奏の種類を増やしていくこと、更に、旋律型を利用できるようになれば、かなり充実した豊かな響きのなかで保育を展開していくことができるのではないだろうかという結論に至った。

(キーワード)

保育者養成のための弾き歌い、左手の伴奏、子どもの歌

1. 問題提起

近年の保育者養成課程の入学者の多くは、ピアノ学習の初学者という傾向である。この背景には、保育者養成校入学試験でのピアノ実技適性検査の未実施、子ども期の習い事の多様化、社会的、経済的な事情が要因であり、この傾向は特異な状況というのではなく、今後も継続すると思われる。この現状は「保育者としての資質や可能性、将来性を音楽的な側面のみで計らない」と考えればとてもよい傾向である。

しかし、養成課程在学中という限られた期間内でピアノ弾き歌い伴奏の技術を一定のレベル以上に引

き上げ、継続維持を保つには工夫が必要である。そのため、多くの養成校はできるだけ簡易にかつ楽曲のイメージを損ねないようにアレンジされた曲集を使用したり、簡単に弾ける伴奏法を教授するという方法がとられているが、これらの方法は何とか免許状・資格取得をさせるという教師側の立場から考えると、当然である。

さて、この状況を子どもの立場で考えた時に、子ども達は音楽をどう感じ取るのだろうか。

子ども達にとっては、簡素なサウンドより、多彩なサウンドのほうが心弾み、「うきうき・わくわく・ドキドキ」するはずである。そのように考えると先

生のピアノ演奏のサウンドで心弾む瞬間が半減してしまうかもしれないことは非常に残念なことである。

本論では「いつの時代でも子どもたちの情操を育むために、豊かな響きの空間で保育展開ができることを保証したい」と考える。

そこで、保育者養成課程でのピアノ弾き歌い演奏について入学時にピアノ学習が未経験に等しい初学者であっても、いずれ多彩な音色で弾き歌い伴奏ができることを目標とし、その手がかりとして本論では伴奏の分類を試みる。

2. 先行研究の動向

子どもの歌伴奏に関する研究は多く行われてきた。「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果」(紙屋・後藤 2008年)では、伴奏形の概論と称して、両手伴奏形と片手伴奏形に分類し、基本的な伴奏パターンとして①右手で旋律を弾く場合、②左手でベースを弾く場合、③弾き歌いの3つを挙げている。そしてその中を更にバックギングによる伴奏、ベースとバックギングによる伴奏、アルペジオ(分散和音)による伴奏、和音の根音を拾う、オールターネイティング・ベース(根音と第5音を交互に奏する)に、分類している。

また「幼小連携を考慮した音楽指導におけるピアノ伴奏の工夫とその指導」(丸林・佐藤 2016)では、コードネーム伴奏法を主に、①コードネームの根音のみでの伴奏、②基本形での伴奏、③転回形を含めた伴奏、④分散和音での伴奏、⑤曲想や歌詞に合わせた伴奏の5つに分類している。

更に、「歌唱教材における簡易伴奏譜の特徴と傾向」(伊藤 2013)では、伴奏パターンについて3つの選択肢を設けて分析しており、それぞれを①様々なタイプの密集和音型伴奏、②和音構成音(単音)による分散型、③ベース音主体(それに伴う単純なリズムを含む)としている。

本論では、これらの先行研究の動向を踏まえ、分類だけにとどまらず、具体的な習得に関して考察を行う。

3. 研究対象

本研究では、『こどものうた 200』(小林美実・編 1975年)を分類楽曲の対象とした。対象とした理由については、①2014年4月現在、全国の幼稚園教諭一種免許状の取得できる大学323学科中104学科を抽出、そのうち19学科が履修テキストとして採用している。②中野・河野(2012年)が施した幼稚園・保育所での使用教材使用楽譜の調査結果で第2位に位置づけた。③永田は(2011年)で202曲中96曲(48%)を次世代に残すべき作品としている。④葛西は(2012年)で『こどものうた 200』のオノマトペを含む楽曲は202曲中122曲ある。」と述べ、「オノマトペは「あそびの要素」をより生き生きと引き出していく。」と述べ、「即ち『こどものうた 200』は今後も歌い継がれる。」と言っている。⑤「幼児教育・保育図書総目録より」『こどものうた 200』はうたあそび、園生活のうた、行事のうた、季節のうたなど、身近な曲を集め、できるだけ原曲に近い伴奏で掲載。以上5点から『こどものうた 200』は今後も保育の現場で活用される楽曲集のひとつであると考え、研究対象に相応しいと判断した。

4. 分類方法

本研究では、「左手の伴奏」に着目し、保育者が保育の現場に立ち、演奏するという立場に立ち分類をする。

「左手」に限定した理由は、幼児期に音楽の楽しみや豊かさを身につけるために、また歌をのびのび歌うために「和声感(ハーモニー)」が不可欠であるからである。歌唱活動自体は保育者の範唱や、歌唱実践から模唱し表現の活動として体得していくことができるが、「和声感(ハーモニー)」については保育者の弾き歌い伴奏の技術に左右される。そうなるピアノのテクニックがある保育者が音楽的に多彩な伴奏がつけられることに対し、そうでない保育者は他の方法を模索することとなる。保育者のレベルに左右されて教育的な環境が変化することは好ましいことではない。なにより、安定感のある心地よい

伴奏の上に自分の声をのせるということは幼児にとって「うきうき・わくわく・ドキドキ」するものであり「達成感」「成就感」「充実感」「満足感」にも通じる。

つまり、左手の演奏技術を習得することは幼稚園教諭にとって必要不可欠の技術なのであると考え、「左手」を分析の対象とするべきと考える。

効率的に「左手」伴奏を習得するためには、1曲1曲を取り上げ、その事例を考察するのではなく、ある程度の方向性や方法について体系的に習得する必要があるため、分析によって理論的に整理していく。

5. 分類のカテゴリー

分類ためのカテゴリーについて述べる。

各小節に、どのような伴奏形が使用されているかを見ていくために、その伴奏形を全部で11種類に分類した。そして、その際、音楽を不自然なフレーズで切ることは極力避けながらも、視覚的に奏法を把握することを優先した。分類のカテゴリーは〈表1〉の通りである。

〈表1〉 分類のカテゴリー

型のカテゴリー	便宜的な記号	カテゴリーの説明
単音刻み型	A	単音、またはオクターヴで、和声の根音、第3音、第5音などを刻むもの
同和音の連続型	B	同じ和音、または重音が連続するもの
異和音の連続型	C	異なる和音、または異なる重音が連続するもの
単音和音型	D	強拍、または中強拍で単音+続く拍を重音または和音で奏するもの
和音単音型	E	強拍、または中強拍で重音または和音+続く拍を単音で奏するもの
分散和音型	F	分散和音
保留型	G	小節に1つの和音または重音のもの
旋律型	H	左手そのものが独自に旋律的に動く。または右手の旋律と同じように動く。オブリガート等も含めたもの
合いの手型	I	右手が休符、または伸びている間に合いの手として奏するもの
例外	J	1小節に複数の要素が入っていたり、上記のものに当てはまらないもの
休符のみ	K	休符のみの小節のもの

本論の〈表2〉以降の「便宜的な記号」とは〈表1〉の「便宜的な記号」と同一のものとして扱う。以下は『子どもの歌200』の実際の譜例である。

〈譜例1〉 A. 単音刻み型



〈譜例2〉 B. 同和音の連続型



〈譜例3〉 C. 異和音の連続型



〈譜例4〉 D. 単音和音型



〈譜例5〉 E. 和音単音型



〈譜例6〉 F. 分散和音型



〈譜例7〉 G. 保留型



〈譜例8〉 H. 旋律型



〈譜例9〉 I. 合いの手型



〈譜例10〉 J. 例外



〈譜例10〉の例外は例外の例である。例外は様々なものがありこの限りではない。

6. 分類

分類は単純な段階より発展させ様々な分類を試みた。

〈表2〉は「全151曲、総小節数1906小節の記号別分布」である。単音刻み型が最も多く、462小節(24.2%)、単音和音型が314小節(16.5%)、旋律型が269小節(14.1%)、同和音連続型が238小節(12.5%)、これらの4つの型で1283小節となり全体の67.3%を占めている。

つまりこれらにより、単音刻み型、単音和音型、旋律型、同和音連続型の技術を獲得することが、左

手の演奏技術習得の近道であるように思われる。

〈表2〉 全151曲、総小節数1906小節の色別分布

便宜的な記号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	計
曲数	462	238	132	314	47	172	146	269	73	44	9	1906

〈表3〉は「1曲に使用される伴奏種類数」である。151曲のうち、1種類の伴奏形で構成されているもの11曲、7%、2種類で構成されているもの38曲、25%、3種類で構成されているもの38曲、25%、4種類で構成されているもの33曲、22%、5種類で構成されているもの19曲、13%、6種類で構成されているもの8曲、5%、7種類で構成されているもの4曲、3%、8種類以上で構成されているものはない。

〈表3〉 1曲に使用される伴奏種類数

1種類	2種類	3種類	4種類	5種類	6種類	7種類
11曲	38曲	38曲	33曲	19曲	8曲	4曲

この結果から、弾き歌い伴奏には一つの楽曲内に同時に複数の伴奏形が出てくることを意味している。2種類だけの伴奏形の楽曲が全体の32%、2~3種類までの楽曲が57%、2~4種類までの楽曲が79%、つまり数字上では同時に4種類の伴奏形を使いこなせば約8割近い楽曲を弾くことが出来るということになる。

〈表4〉は「順位1位の分布表」である。

これは、どのカテゴリーの伴奏形が、その楽曲の中で多く使われているかを示している。

1位は単音刻み型34曲、23%、2位は単音和音型29曲、19%、3位は同和音連続型21曲、14%、4位は旋律型16曲、11%、5位は分散和音型15曲、10%、6位は保留型8曲、5%、7位は異和音連続型5曲、3%、8位は和音単音型4曲、2%、その他は、2つ、3つまたは4つを同列1位に持つ曲で19曲あり、全体の13%であった。

〈表4〉 順位1位の分布表

順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	その他
便宜的な記号	A	D	B	H	F	G	C	E	
曲数	34曲	29曲	21曲	16曲	15曲	8曲	5曲	4曲	19曲

〈表3〉〈表4〉より同時に4種類までの伴奏形で構成されている楽曲をさらに詳しく見ることの必要性を感じる。

〈表5〉は「1種類構成楽曲の内訳(11曲)」である。この内訳は単音刻み型と単音和音型が同数で4曲ずつ36%ずつ、分散和音型2曲18%、番外旋律型1曲9%である。

〈表5〉 1種類構成楽曲の内訳(11曲)

順位	1位	1位	3位	
便宜的な記号	A	D	F	H
曲数	4曲	4曲	2曲	1曲

〈表6〉は「2種類構成楽曲の内訳上位3位(38曲)」である。全38曲25%であり、この内訳は単音刻み型と旋律型(順不同)8曲22%、同和音連続型と異和音連続型(順不同)5曲14%、単音和音型と分散和音型(順不同)3曲8%、番外22曲58%である。

〈表6〉 2種類構成楽曲の内訳上位3位(38曲)

順位	1位	2位	3位	番外
便宜的な記号	A&H	B&C	D&F	
曲数	8曲	5曲	3曲	22曲

〈表7〉は「3種類構成の楽曲」である。3種類構成の楽曲も38曲25%である。単音刻み型と分散和音型と旋律型(順不同)4曲11%、単音刻み型と旋律型と合いの手型(順不同)3曲8%、単音和音型と同和音連続型と旋律型(順不同)2曲5%、単音刻み型と単音和音型と合いの手型(順不同)2曲5%、単音刻み型と単音和音型と旋律型(順不同)2曲5%、番外25曲66%である。

〈表8〉は「4種類構成楽曲の内訳」33曲である。

4種類構成の楽曲は33曲中29曲がそれぞれの組み合わせに分かれた。

〈表7〉 3種類構成の楽曲

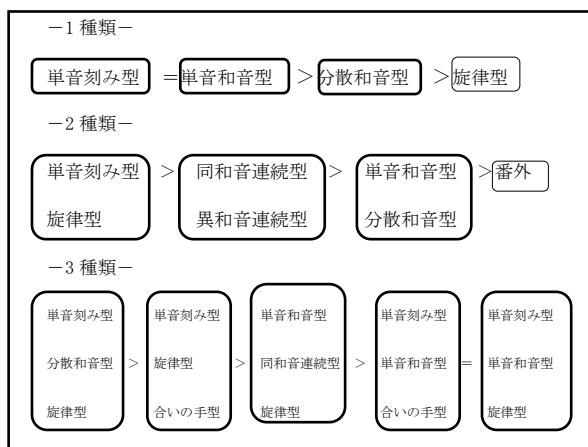
順位	1位	2位	3位			番外
便宜的な記号	A&F&H	A&H&I	D&B&H	A&D&I	A&D&H	
曲数	4曲	3曲	2曲	2曲	2曲	25曲

〈表8〉 4種類構成楽曲の内訳33曲

順位	1位		番外
便宜的な記号	A&B&F&H	A&C&H&G	
曲数	2曲	2曲	29曲

7.考察

分類の結果を以下のようにまとめることができる。



1曲における伴奏の種類は非常に多彩で、複数の形の習得が必要とされることが確認された。しかしそれらの種類の複数の組み合わせは様々であり、楽曲ごとに分類の要素を把握することにとどまった。

今回の分析では、単音刻み型と単音和音型の伴奏形の使用頻度が明らかに多いという結果が導き出され、習得すべき技術の上位を占めていることがわかる。つまり、この形の伴奏形楽曲を積極的に学習することによって、『こどものうた200』の弾き歌い伴奏の演奏技術の早期獲得ができると思われる。

また、基本的な伴奏形である、同和音の連続型も第4位を占めており、大人の手であるということから、早期

の段階で意識的に習得してよいと思われる。

意外な結果であったのは、演奏にはそれなりの技術が必要とされると思われる旋律型が多く使われていたことである。旋律型の手法を使っている作曲家は数名の限られた作曲家に多い傾向があるとも言えるが、音楽の楽しさや豊かさを伝えていくためには、旋律型のテクニックを身につけていくことが望ましいと思われる。

本研究の分類の結果として、『こどものうた 200』の弾き歌い伴奏をするにあたり、単音刻み型→同和音連続型→単音和音型の順で伴奏の種類を増やしていくことがまず最良の手順であり、更に、旋律型を利用できるようになれば、かなり充実した豊かな響きのなかで保育を展開していくことができるのではないだろうか。

本研究は『こどものうた 200』を分類の対象と限定し、便宜的な分類を用いたが、本結果の手順で伴奏形を獲得していくことが、豊かな響きの環境での保育展開していく一助となると思われる。

今後はこの結果を踏まえ弾き歌い伴奏の指導に活用していきたいと考える。

〈文献・資料〉

- 『こどものうた 200』（小林美実・編 1975年チャイルド本社）
 中野研也・河野久寿「保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連」（2012年）
 永田雅彦「こどものうた 200の音楽的評価」（2011年）
 葛西健治「こどものうたにおけるオノマトペに関する一考察」（2012年）
 紙屋信義・後藤みゆき「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果—アレンジによる伴奏法を考える—」（2008年）
 伊藤誠「歌唱教材（低学年教科用図書掲載219曲）における簡易伴奏譜の特徴と傾向」（2013年）
 丸林実千代・佐藤千佳「幼小連携を考慮した音楽指導におけるピアノ伴奏の工夫とその指導」（2016年）

〈譜例 1〉〈譜例 4〉

p. 59 おべんとう 天野蝶作詞 一宮道子作曲

〈譜例 2〉〈譜例 6〉

p. 64 おかえりのうた 天野蝶作詞 一宮道子作曲

〈譜例 3〉〈譜例 7〉〈譜例 9〉

p. 100 めだかのがっこう 茶木滋作詞 中田喜直作曲

〈譜例 5〉

p. 160 おつかいありさん 関根栄一作詞 團伊玖磨作曲

〈譜例 8〉

p. 78 たなばたさま 権藤はなよ・林柳波作詞 下総皖一作曲

〈譜例 10〉

p. 150 いぬのおまわりさん 佐藤義美作詞

大中恩作曲 伊東慶樹編曲